

南宋の四書学と自由の気風

福谷 彬 (FUKUTANI Akira) *

朱子学は中国思想史上空前にしておそらく絶後の体系的な思想とも称され、「宋学」と言えば朱子学の代名詞ともなっている¹。しかし、南宋の思想界においては朱子学一尊には至っておらず、朱子の存命時には大きく分けて四つの学派（朱子・張栻・呂祖謙・陸九淵に代表される）が互いに勢力を争う関係にあった。南宋の思想界の状況を見て他の時代と特に異なると感じるのは、その思想的多様性にも関わらず、思想家間の交流が非常に友好的で自由闊達なことである。

例えば、朱子・張栻・呂祖謙の三人はそれぞれ独立した異なる学派の領袖の立場にあったが、彼らはその思想的立場の差異、家格の違いにも関わらず、その関係は非常に良好であり、膨大な書簡をやり取りして生涯を通じて互いに切磋琢磨する関係にあった。互いに見解が一致した問題に関しては著述を共同執筆することもあったが見解が異なっても互いの立場を尊重した。また朱子と陸九淵はお互いを強力な論敵と意識しつつも、呂祖謙の仲介によって「鵝湖の会」と呼ばれる公開討論会を行って一致点を模索し、また一方の書院に招いて講演を行うこともあった。朱子が晩年に弾劾され、官を追われた際には朱子と学派を殊にする葉適が朱子を弁護する上奏を行った一幕もあった。

発表者は、このような、多くの思想的相違を含みつつも、互いの立場を尊重して切磋琢磨した南宋の思想空間そのものに着目する。そして、このような状況を可能にした背景として以下の要因を考える。

- ・宋の太祖趙匡胤の以来の「言論によって士大夫を殺さない」という国是
- ・「四書」という共通に尊ぶ古典を持っていたこと

以上の二点である。前者は宋代において、士大夫には一定の言論の自由が保障されていたことを示すものであると考えられる。後者は士大夫が一定の価値観を共有していたことを示す。発表者が研究対象とするのは、この後者についてである。

例えば、『大学』には「修己治人」（まず己を律することと、人を統治することの理念の一致を目指す）の政治思想があり、『孟子』や『中庸』には、衆人と聖人の間には先天的な違いはないという考え方が記されている。後者は家格ではなく実力による人材登用を目指す科举の理念を支えているものと言えるし、あるいは家格に拘らない士大夫間の交流の面にも影響を及ぼしたことも考えられる。

また発表者は「四書」の内容を体系化する作業の中から、解釈の違いが生まれ、その結果として思想を殊にする多くの学派が成立した、と考える。しかし、その根本の部分では士大夫の自説の主張を可能にする土壌としての言論の自由と、一定の価値観の共有という共通の地盤があるのであり、そうであるからこそ立場を超えた自由闊達な交流が可能であったと考える。発表者はそのような思想空間として宋学の再検討を模索する。

* 京都大学文学研究科中国哲学史専修博士三回生。

¹ 本稿は、島田虔次『朱子学と陽明学』（1967年、岩波新書）、佐野公治『四書学史の研究』（1988年、創文社）、土田健次郎『道学の形成』（2002年、創文社）を参照した。